
憑依先・・・これはねえだろ・・・

3K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑依先・・・これはねえだろ・・・

【Nコード】

N5239I

【作者名】

3K

【あらすじ】

死んで目覚めるとそこはどこかもわからない大自然の中、自分の目に映った自分の姿を信じてことができず、己の姿を見るために水場を探す主人公。そして川にたどり着いた主人公が見た水面に映る自分の姿とは！！？

1 話目（前書き）

初めまして、3Kと言うものです。アンチしかしない荒らしはお断りしておりますが、どこがどう悪いとハッキリ言ったださる方は大歓迎です。

これが初めて書いた作品なので文章が稚拙でしょうが、それでも我慢できる、また、俺らの感想参考にしてどんどん良くしていけばいい！！

という方はいらっしやいませ。

ただ、は？なにこれ？つまんねえから。

のみしか言わない感想は止めていただきたい。先ほども書きましたようにどこが悪いのか…、を書いてください。全部悪いというのも同類ですよ。

1 話目

1 話 神様・・・恨んでいいでしょうか・・・

（まったく・・・狂ってしまいそうだ・・・いやすでに狂っているのか？・・・いったい何の因果でこんなことになってしまったのか・・・）

そう思いつつ、細長くなってしまった頭を振る。

（確かに憑依という言葉はあるが・・・まさか実体験するとは思ってもみなかった。死ぬ前まではあれほどそうなればどれほど楽しいだろうかと思っていたのだが・・・）

憑依先で・・・これは無いだろ・・・）

鋭く敵を引き裂くのに適した爪牙、そして早く走り高く飛び上がるほどの力を持った強靱な脚、死ぬ前とは比べ物にならないほど研ぎ澄まされた動体視力、ここまででは聞けば強そうだと万人が思うだろう・・・いや・・・事実この憑依先は強いのである。

群れの中でも頭一つ抜けた戦闘能力を持ち、リーダーたる覇気も持ち合わせている。

（しかし・・・それでは・・・それだけではこの世界では生き延びるだけの力が足り無すぎる・・・、オレは一体どうすればいいのだ・・・）

気がついてから始めは信じたくなかった・・・ひたすらに走って水場を探した・・・

しかし男はすでに気がついていて、自分が人間では無くなってしま

っていることに、ここが地球とは違う異世界だということに・・・
そしてその世界を自分は知っているという事に・・・。されどその
考えを否定した。
常識では考えられない事だったからだ。しかし水場についてからそ
の考えを肯定せざるおえなくなった。

水面に映る己の姿、それは大きなトサカを持ち、体は鱗で覆われ海
のごとく青くその上に黒い縞模様が入りエナメルのように光を反射
している。生物を容易く引き裂けそうな爪と牙、そして水面から覗
き返す己の爬虫類のような目

絶叫した、声よ枯れよといわんばかりに、その際近くにいた草食恐
竜どもが逃げ出したがかまっていられるものか、夢なら覚めよと己
の体を何度も傷つけた、しかしさめることは無かった、なぜならこ
れは夢などではなく現実だったからだ。

落ち着くまでどれほどかかっただろうか、気付けばあたりはすつか
り暗くなっていた。

明かりなどあるはずも無くあるのは月明かりのみ少し先でさえ見え
ぬ闇が支配する世界が広がっていた。
そこで場面は冒頭の部分に戻る。

（どうすれば、この世界・・・モンスターハンターの世界で生き延
びられる！！しかもこの体でだ！！なぜこいつの体なのだ！！他に
もいい憑依先があったはずだ！！なのに何故だ・・・どうして・・・
）
そこでたまらず声がでる、いやそれは声ではなく鳴き声であった。

「ギヤオ！！ギヤアオ！！（どうして！！ドスランポスなのだ！

「:)」

1 話目（後書き）

え〜と、某理想郷で二重投稿で本体の削除だなんだと、言われておりますが、私は本人だ！と叫んでおきます。

まあ、信用されなければ意味がないのですが・・・、

この作品は理想郷に元は投稿していたもので、今回の業者騒ぎによって投稿がシャットダウンされて焦った作者がこちらに飛んできた、という成り行きです。

2 話目

（ふう・・・取り乱してしまったか・・・柄でもない、いやこの場合仕方のないことだ。誰だってこんな事があれば混乱するだろうに、その上この体じゃな・・・っと、いかなそんな事を考えている場合ではなかったな。）

脇にそれかけた思考を元々考えていた事に戻す。

（とりあえず今考えることはどうやって生き延びるか・・・だ。ハンター達に協力してモンスターを狩るか・・・いや、言葉が通じない、それに協力したといえ今度は此方にその矛先が向く・・・か。くっ・・・せめてクックならば飛んで逃げる事が出来るというものに！！しかし、いずれはハンターの力を借りねばなるまい。ハンターがモンスターと戦えるのは経験と知恵、身体能力そして・・・此方の牙や爪を受け止めるだけの防具そして古龍種ですら傷つけられるその武器があるからだ。この身は人間よりも段違いの身体能力がある。装備さえ手に入れられれば生き残ることが少しは楽になるのだが・・・。）

そこまで考えたときに少し空腹感と喉の渴きを感じた。それもそのはずであろう。

ここに来てからは水場を求めて走りそして自身を傷つけたただけなのだから。

（ちっ・・・、少し腹が減ったな・・・、水は目の前にあるとして獲物はどこにいるのだから、ここは・・・走ってきたときに見た景色からして平原か・・・。ならばあまり気をつけるべき敵もないだ

ろう。そろそろ朝だ。アプトノスの子供でも狩るとしようか・・・問題は生肉を食べるかどうかだが・・・。幸いこちらの地理は何故か把握は出来ている。この体の持ち主の記憶だろうか？くうっ！！）

日上がり闇の世界が終わりを告げる。眩しさに思考が遮られ、そしてその原因を見つめなおした時、思考は完全に停止を告げた。

（これは・・・すごいな・・・）

そう、そこに広がっていたのは生きていた時には見ることがかなわなくなっていた、壮大にして神聖ささえ感じるほどの自然であった。どれくらい目を奪われていただろうか・・・、小鳥の囀りで正気を取り戻し、惜しみながらもその光景から目を離す。

（まさか、あのような美しい光景が見ることが叶うとは、憑依したのはこんな身だがそれだけは感謝していいかもしれん。ここは空気や自然が綺麗なままだったな、そういえば。そう考えたら惜しい事をした・・・晴れ渡った夜空もさぞ美しかったことだろうに。まあ・・・それはまた考えるところ、どちらにしろこれから飽きるほど見ることができるのだから。さて・・・では・・・狩りを始めるとしよう。一匹狩れば今日一日は大丈夫だろう。）

そうして見据えるは遙か先に見え始めたアプトノスの群れ。

息を潜め気配を消し草むらに伏せる。自分達の首に死神の鎌が突きつけられていることも知らず、水場に近づいてくるアプトノス達。

（まだまだ・・・奴らの群れのどれかが水を飲みはじめるのを待つんだ。

よし・・・そのまま近づいて来い・・・そうだ・・・、あと少し！
）
はやる気を抑え気配を消し続ける。そして一番近くで水を飲み始めた群れの中でも一際巨大な一匹に向かい・・・。

（今だ！！）
力がため続けられていた脚から瞬間その力が開放される。その速さは矢のごとくであり、
水を飲み始め油断していたアプトノスに避けられる道理はなかった。

『覚悟！！』

（アプトノスといえど体格差は油断できない！！狙うは首！！）
鋭い爪が獲物の首を切り裂き、肉を引き裂く事に特化した牙は獲物を逃がすまいと噛み付く！！
突然襲った痛みにアプトノスは悲鳴じみた鳴き声を上げる、いや上げようとしたが喉を切り裂かれた今鳴き声をだすことはできず、その身に取り付いた捕食者を引き剥がそうとその身を振り回していた。その様子を見てようやく状況を把握した群れが蜘蛛の子を散らしたように逃げてゆく。

（くう！！首を掻き切ったというのに意外に粘る！！ならばさらに切り裂き喰らうまで！！）
喰らいついた喉をそのまま食いちぎる、その場に飛び散るは夥しいほどの血液、しかし獲物はその場で倒れる事無く逃亡を開始し始めた。

(なっ!!あの傷で何故まだ行動が出来るだど!!普通ならばそのまま倒れて・・・普通?何をもつて普通だと決め付けるんだ?これから生き残るために戦わなければならぬ相手のほとんどが人ではないというのに、チッ!!人を相手にする感覚でいるのは危険だな・

ズズズウン!!大きな物が倒れる音がして我に戻る

つと獲物は!!)

喉を食いちぎられたアプトノスは少し離れたところで倒れていた獲物であるアプトノスは捕食者とその身から離れてから生き残るために必死の逃亡を開始した。しかし満足な呼吸もできず多量の血液を失い、力も少しずつ抜けてゆくなかで、逃げ切ることなぞ不可能であった。その倒れる音を聞いて捕食者は我に返ったのだった。そしてその姿をみて捕食者は思う。

(許せとは言わない・・・生きるためには仕方が無いことだ・・・それでもやはり・・・力の無い草食動物を殺すというのは後味が悪いな・・・)。
さて・・・食料にするために殺してしまったのだ・・・こうなればオレが生肉を食べるか食えないかなんて関係が無いな・・・喰うのがせめてもの礼儀だ)

そしてその息絶えた獲物の上に乗るその肉を喰らい始める。

(流石に生臭いな・・・しかし味覚まで変わっているか・・・、それともアプトノスの肉が元からこの味だかは知らんが・・・美味いな・・・、そういえば生肉を食うのは生きていたころでもあったか・・・、要はユツケと似たようなものだと思えばよいのだ。)

余談であるが彼が喰らった部位は霜降り質の肉であり非常に美味とされる箇所であった。

ドスランポスはその身の空腹が癒えるまで獲物の肉を喰らうが、元々大きさが違う、全て食い尽くせないことなぞ見えた結果であった。

(とりあえず今日一日はこれでしのげるか……。寝床は……。おぼろげながらある事は解んだが……。詳しい場所は思い出せん……。やはり知能がいいといわれても獣並みか……。しかし巢はそこにしかないのだ……。この身の帰巢本能に頼るしかないのだろ
うな……。)

考えが纏まったところで行動を開始する。目指すはここに来た始めの場所。

2話目（後書き）

うん、やはり修正しながら投稿するか？最初の方の話はやたらと中二病の臭いが濃いからなあ…（表現の仕方等等）まあ最初は、Fateの作風目指してたからなあ、ん、直しながらいくか…、Fate臭も後あと抜けてきてるから長くは掛からないでしょう。感想で驚いた時と平常時での口調の差が激しすぎると言われてましたし、それも含めて直していく事にしましょう。はて、感想でこれからの進展は変わるかどうかと言われましたが…、さあ？どうでしょうねえ（ニヤリ）

3 話目（前書き）

え、後書きの最後のあたりにちょっと重要なお知らせが書かれていますので、読んでいただければ幸いです。

3 話目

(チイッ!!しつこい奴だ!!いい加減に追ってくるのを諦めろってんだ!!)

最初の場所にもどろうとして森に入っただけでしばらくした時にそれは現れた、

猪の様な外見を持つモンスター「ブルファンゴ」に……。

最初避けられたのは運が良かったとしかいいようがない、不意をつかれて足場の悪いなか、かなりのスピードで突進してくるそれを避けられたのは、それが鳴らす盛大な物音とランポス種が持つ跳躍力そして獣の持つ危機察知能力のおかげであった。

(音が気が付いた瞬間とつさに上に跳んでいなければどうなっていたことやら……、想像もしたくないな……)

再度、突撃してきたそれをサイドステップでかわす。かわされたブルファンゴは止まらずそのまま背後の木に突っ込む。

バキィ!!メリメリメリ……ザッシャアア!!

その木はその突進の重さに耐えかね細枝のごとくあっけなく折れる。

(直撃すればミンチか……)

あまり太くない木だったとはいえなんつゝ突進力だよ)

すばやくそこからまた逃げるドスランポス、追うブルファンゴ

(こいつを殺すためにはまず腹をみせてもらわないとな、猪は背中
の筋肉が発達して熊の一撃ですら耐えることができるどこかで読

んだ気が・・・、しかしどうする、あのブルファンゴどうにも方向転換が速すぎる、それに牙がかなりでかい・・・刺されたらアウトだな。ん？牙がでかい？もしかしてこいつドスか？)

突進を今度はギリギリまで引き付け相手の頭上を越えるようにして跳ぶ。

相手にしてみればいきなり眼前の相手が消えたように見えたであろう。

(やはりか、背中が若干白い……、どおりで強いわけだ、群れからなぜボスがはぐれているのかは知らんが…、長引かせるのは危険だな。手下がきたら拙い……、奴でも折れないような大木は……、あそこか、少し距離があるがやるしかないな)

大木の元にめがけ全力で走る、その移動音でドスファンゴは此方がどこにいるのかを察知し再度突進の準備をする。しかし力を溜め込み走り出したときにはもはやドスランポスと大木との距離はもう半分もなかった。しかし直線を走る速度で言えば圧倒的にドスファンゴの方が速い、ならばドスランポスが大木の元へたどりついた直後に追いつき発達した牙をそれに突き立てることなど簡単なことだった。

(やはり速い！！だが大木までつけば！！)

脚力を限界まで酷使し大木の根元へたどり着きその幹に脚の爪をしつかりと喰いこませ後ろを確認すること無く次の動作に移る。そしてほとんど時間を空けずにドスファンゴがそこにたどり着く。

ズツズウウン

森に響く重厚な衝撃音しかし、ドスファンゴが衝突したのはドスラ

ンポスではなくただの大木の幹であった。見失った相手を探そうとすると不意に背中に衝撃が走り脚が地面に食い込む、何が起きたのかを理解する前に顔面ごと片方の目を切り裂かれる。痛みを振るい上げ自身の上に乗る何かを引き剥がそうと体を揺すりそれを振るい落とそうとするがその前にその何かに自身の側面を蹴られバランスを崩し地面に押し倒された。

（主人公視点）

（間に合った！！）

木の幹を足場に真上へと駆け上がるように跳ぶ

ズズウウン

紙一重でかわしたドスファンゴが大木に突っ込む

（危ない賭けだったが勝った！！これで！！）

真下にいるドスファンゴの背に着地した直後に体を倒し顔があるであろう場所を引き裂きすぐに体勢を立て直し振りほどかれる前にドスランポスの背中の側面を蹴って押し倒すと同時に跳躍する。そして着地したと同時に起き上がるうとしているドスファンゴに体当たりをし再度転倒させて無防備な腹をむき出しにする。そしてそこにめがけ爪を奔らせるドスランポス。

鮮血が飛び散り臓物がその切り裂かれた腹から零れ落ちる。

なおも立ち上がるうとするドスファンゴの足の腱を喰いちぎり行動不能へと叩きこむ。

それはしばらくもがいていたがしばらくすると動きが弱まっていきついには動かなくなつた。

（……………ふう、まさに紙一重だったな……………、一瞬でも遅かったら

ミンチだ……、後ろを確認しないでよかった、いやはや、どこぞの赤いカブトムシに乗る人の様には言えんな……分の悪い賭けは好きじゃない……、さてここは……どこだ？)

逃亡劇の後にたどり着いたは森の水場の近くであった。

(まずは血塗れの体でも洗うとするか……。)

しかしドスランポスは気付かない、その姿を見つめる多数の目があ
ることに……。

そしてその場に向かって来ている新たな敵に。

3 話目（後書き）

なんてこった！！？私としたことがブルファンゴとドスファンゴの牙の大きさの違いを見落としていた！あつちじゃそれに気付かないでスルーしてしまっていた・・・、これは帰ってから修正が必要だ、モンハンWiki見ながら書いてたから運よく気付けたもの、いやはやとんでもなくでかいミスをしたものです。あと、あつちとこつちでは若干口調の変化で性格も変化しているように見えるかと思えます。

作者の新たな食指が動いています、どうしよう・・・めっちゃ書きたい。無論、同時進行で

『転生先は魔王の弟！！？』

死んで目覚めて見れば赤ん坊、若くして死んだ主人公は人生経験という物が全く無い！！言語がわからないで色黒のお姉さん達に育てられる双子の兄弟、言語が理解できてきた時わかったのは兄の名前がガノンドロフ！！この場所がハイラルのナバルであること！！原作を知っているが故にいつ兄に暗殺されるか戦々恐々とする毎日が始まる！！？でも兄は意外と弟思いで・・・、勘違いすれ違いの Comedy 風、原作なんてシラネエよ！！すれ違う兄弟愛（主に一方的に）、城で起きる数々の勘違い、そしてそれに巻き込まれる主人公！！さあ、狂った伝説が今始まる・・・。

見たい人いるだろうか？ゼルリンは作者のジャステイス！！異論は認める。好評なら書くのだが・・・、まあ Wiki とかニコ動で詳しいストーリーとか設定を確認しなければならぬのだがな。

4 話目

（それにしても殺し合いをしてるあいだは怖いとかはあまり感じなかったな…、

むしろどうすれば殺せるかだけを考えていた…、もしかすると元々この体の持ち主の精神と憑依した時に融合するかして自我が強いオレの方が残ったのか？ドスランポスの記憶がうつすらと残っていたのだからその可能性は高いか…そうじゃなけりゃ戦える理由が無い。）

そう思いながら体についた血を洗い流していく

（ふう…何とか体についた血を洗い流すことができたか…。

それにしても…誰かに見られているような気配がするんだが…、勘違いか？

ふむ…ここは一度…）

そこから背を向けて歩き出す…、ように見せかけて一気に振り向く！！

ガサツ！！

（やはり何かいたか！！音はあそこか！！）

音のした方へと走り出す。そしてそこから逃げ出す白い何か

「にゃああああ！！まずいにゃ！見つかったにゃ！！」

（アイルー？言葉が通じるか試してみるか？）

追いついてその背中に背負われた荷物を啜えて持ち上げる

「フラアアアアツ!!」

「皆フランチを助けるのにゃ!!」

そこかしこから出てくる爆弾掲げた白アイルー達

(じょ…、冗談じゃねええええ!!)

啜えているものを放す事無くその場から逃げるドスランポス

「ぐにゃ!!に…荷物が脱げにゃい!!た…助けてくれにゃあああああ!!」

悲鳴を上げ続ける啜えられた白アイルー

しかしドスランポスの足の速さに追いつける訳もなく。

神風特攻隊のような白アイルー達は引き離されていく。

「このままじゃ、追いつけないにゃ!!皆、爆弾を投げるのにゃ!!」

(空爆注意ってやつかああああ!!ってマジで投げてきやがった!!)

ドオン!!ドオン!!ドドオン!!

仲間を啜えるドスランポスの近くに着弾する小樽爆弾

(あいつら仲間が爆弾に巻き込まれてもいってのかよ!!ってそ
ういやあいつらゲームでは大樽爆弾の爆発に巻き込まれても生きて
やがったな…、今思えばよく農場のアイルー生きてたな、あれやら
せたハンターは鬼畜にみえたに違いない!!)

思考が少しテンパっているが足を止めることなく走り去る

「フラアアアアンツ…」

声が遠く聞こえる、もはや爆弾も届かない距離へと逃げ延びたドスランポスは

森の外へと向かう

「やめてくれにゃあああ!! 食べても骨ばかりでおいしくないにゃああ…」

(ネコが何か言っているがとりあえずは放置しておくか…)

森の外で啜えた白アイルーを放す。

揺られすぎて酔ったのかグッタリとしている白アイルー

その体を鼻先で突付く。

「ああ…僕はここで終わるんだにゃ…兄さん先立つ弟を許してくれにゃ…」

なにやら小声でぶつぶつと言っている。

『起きろ、別に喰うつもりは無い。』

「ああ…、恐怖のあまり幻聴が聞こえるようになったみたいだにゃ」

『幻聴じゃねえ。』

「?????なんでドスランポスが意思を持った言葉を発することができるのじゃ?」

目の前のアイルーが訝しそうに狭い額にしわをよせる。

『ん？他のランポス共では無理なのか？』
首を傾けながらそう尋ねる

「飛竜種でもできないにや！あいつらは獣と同じにや！何か解らないほど粗雑な意思しか伝わってこないのにや！あんたは何者にや！ドスとはいえランポスがそんなハッキリとした意思が有るなんてありえるはずがないのにや！！」

『そうなのか…、意思といったがそれはお前だけが読めるのか？』

「違うにやアイルー族だったらできることにや！！僕たちはそうやって人間から言葉を学びこつて話すことが出来るようになったのにや。」

誇るようにその小さな胸を張るアイルー

「で、本当に食べるつもりはないのにや？」
疑うようにこちらに聞いてくる

『喰われないのか？』

「そんなわけあるはずないにや！！」

『ところでお前、名前は？』

「フランツだにや、そう言うあんたは何者なんだにや？それにこつちも名乗ったんだにや名乗り返すのが礼儀だと思つにや。」
「もはや喰われることが無いと理解したのか、態度が大きくなっている

『オレか…、オレは…、一体何者なんだろうな、オレにも分からん、名前は…存在しないしな…』
自嘲したようにそう言い放つドスランポス

(ドスランポスになってから名前なんて気にしたことが無かったな…必要とも思つて無かった、生前の名前を名乗るといふのは…未練だな、それにこの世界で日本の名前は不自然すぎる)

「名前がないのじゃ？それはだめにゃ！！名前は全てをあらわすつていう格言があるにゃ！！すぐに考えるのにゃ！！」

(考えると言われてもな…ドスランポスの名前からとるか…、ドラン…、どこのドラクエだよ…、ランス…鬼畜王だな…、駄目だ…禄な名前が思いつかん…、イニシャルでいくか…、ドス・ランポス、DR、はごろが悪いな、ならばRD…ふむこれはいいな、何か物足りない…見た目は爬虫類に近いから…)

『RD…、RD=Rリザード』

「アールディー=Rリザードにゃ？」
その言葉を聞き首を軽く縦に振る

「アールディー…、ならアルって呼ばせてもらつにゃ。」
「なに？」

「愛称みたいなものだにゃあまり気にすることないにゃアル。」

『それで決定か、まあいいがな。』

(アルか…まあ…悪い名前でもないな、語呂もいいし、これからは

そう名乗るとするか。)

「ところでアル、そろそろ群れに帰りたいのにゃ!! また連れて行ってもらってもいいにゃ?」

『もとよりそのつもりだ…、乗れ』

「上にのるのにゃ?」

『それ以外なにある』

そういつてしゃがむアル

「わかったにゃでは失礼して…」

そういつてよじ登るフランツ

(これは拾い物かな…? アイルー族さえいればハンターとも渡りをつけることもできるだろう…。 あゝ、しかしとんだ誤算だ…、話によると他のモンスターに理性なんてものは望めないらしい…、となればアイルーと行動するには手下を作るのを諦めなけりゃならんか…、まあ、下手に手下を作りすぎてハンターに依頼されるよりはましだな… そうなったらもはや交渉の余地もない…)

手下を作り大軍団を率いるドスランポスそれに立ち向かうは百戦錬磨のハンター達…、

(無理だな…、勝てる気がしない。)

当然のごとく思い描くのは血を流して倒れる自分の姿

(やはりハンターギルドに渡りをつけてオレもハンターの真似事をするしかないか

あれほど強力な武器を作れる職人なのだ鉤爪の形をした武器でも作れるだろう。

防具についても同じことは言えるな。それにしても一回でいいから数の暴力をリアルでやってみたかったなあ……)

「どっしたのじゃ？早くいくじゃ。」

(おっと……これはまた後で考えるか……)

『悪い、行くぞ』

振り落とさないようにゆっくりと走り始める。

（道中）

「……と言う訳で僕の兄さんのフランススは今は立派なお供アイルーとしてご主人となったクレイって人と日々ハンターの仕事をこなしているのじゃ。」

『ほう……それはすごいな』

(こいつは完全に当たりだな……ようやくオレにも運が向いてきたかなんとしても渡りをつけてもらおう!!オレは獣として生きるのにはゴメンだ。)

しばらくすると遠くから音が聞こえ始めた。

ドオン……ドオオン・ドドドオオン……バキィ……ズズウウン

自分たちが向かう先で戦闘の音がする。爆発音はおそらくアイルー達の小樽爆弾であろう。

(しかし何と戦っているんだ？木が折れる音が聞こえた…、まさかオレが先ほど殺したドスファンゴの子分どもか？)

「何にや？この音は？」

背中にしがみ付いているフランスもどうやら気がついたようだ。

『気がついたか、どうやらお前の仲間が戦っているらしい。』

「そ…、それは大変にやすぐに戻って加勢するにや！！急ぐんだにや！！」

群れの仲間が心配なのか急かしてくるフランス、無理もないだろう。

『了解、？まつてるよ！！』

一気に加速して目的地に向かう。

爆発音は段発的にだがまだ続いている。

(しかし妙だな…、爆弾を投げているのならばもつと爆発音が多く聞えてもいはずだが…、
もしかして投げすぎて爆弾が無くなったのか？…まあ、あの弾幕はやばかったしな…八八八八…)

あの時の事を思い出し嫌でも顔が引きつるアルであった。

「音が…やんだにや…。」

『心配するな、どうせ敵が逃げたかやられたんだろ。』
そう言って励まそうとするが…、

「クウアツオ！！クアツオ！！」

聞こえたのはどこかで聞き覚えのある声であった。

悪寒が体中に奔り、獣の本能が、ニゲロと叫ぶ、しかし逃げだすことは叶わなかった。

声を聞いた瞬間フランツが飛び降り、聞えた場所つまりは目的地へと駆け出したからだ。

声をかけようとするが思うように声が出ない。しかしこの世界で見えた希望の光をみすみす行かせることは出来なかった、その後を追うように動き出す。

(この感情は恐怖か?!?!?なぜだ!!あの声はここに来て初めて聞く鳴き声だぞ!!いや……オレはこの鳴き声の持ち主を知っている!!こいつは……)

茂みを掻き分けその場所へと躍り出るフランツ

「皆!!無事にや!!?」

しかし、そこに広がっていた光景は

潰された焼き殺された引き裂かれたアイルーの死体死体死体死体死体……

そしてその中で勝利の歓声をあげていたのは……

「イ……、『イヤンクック!!』」

声に反応したのかイヤンクックはグルリと此方に振り返る。

しかしアイルー達を殺すのにかなりダメージを負ったのである。う体の所々が爆弾によって吹き飛ばされていたり焦がされており、動きにあまり精彩がない。

(クツ・・・バレたか!!ここは逃げるしかない、オレはあいつには勝てない!!肉体のポテンシャルが違いすぎる!!)

『フランツ!!逃げるぞ!!』
しかし仲間を殺されたフランツは逃げることを選択せず……

「皆の仇にやあああ!!」
叫びながらイャンクックに向かい走っていった……。

『バカ!!死ぬ気か!!』
その言葉は復讐にかられたフランツに届くことは無かった。

(どうする!!見捨てるか!!いや……、ここで見捨てたら、何もかも振り出しに戻る!!しかし命あつてのモノダネだろう?ここは逃げるんだ!!しかし……、)

そこまで考えたところで果敢に突撃していくフランツが目に入る。

…、
(あんなに小さい奴だつて仲間が殺されたといえ根性を見せている、それに比べてオレはどうだ?今何を考えた?ハンターの真似事をしようつて奴がイャンクック相手に逃げる?ハツ!!情けない!!ああ、やってやるさ!!殺してやる!!)

自分も走り出そうとしたその時突風が吹きフランツが飛ばされてくる。

イャンクックが羽ばたき風を起こしたのだ

「にゃあああああ！！ぎゃん！！」
体をはって受け止める。そしてこちらを見ていたイヤンクックと自然と目が合う

視線が交わり、そしてイヤンクックの標的が変わる。
そう次に獲物とみなしたのは

(オレか…、)

『フランツ、そこに隠れとけ！！』
と言い木の根の下に出来ていた空洞に放り込む。

「にゃ！！ぼくも戦つにゃ！！」
そう言つてすぐに這い出してくる

『黙つて隠れてろ！！お前では足手まといだ！！』
突き放すように言葉を叩きつける。

「にゃ！！？ふざけるにゃ！！これは僕の戦いにゃ！！おとなしく
見てるだけなんて出来るはずがにゃい！！」
その目は揺るぎが無く、無理やり言つても戦闘に参加するだろつこ
とが見て取れた

『チ…、ならフオローを頼む！！お前の兄貴はお供アイルーなら弟
のお前もできるはずだ！！』

「任せろにゃ！！」
仲間の死体と一緒に転がっている小樽爆弾を準備しながら答えるフ
ランツ

(奴の甲殻にオレの爪が通じるかが肝だ、しかし…、まず狙つとこ
ろは一つ！！！)

狙うところを定め走り出す

「ギユイイイイアアアア！！ギユイイイイアアアア！！」
奇声を上げながら此方に突撃してくるイヤンクック

（引つ掛かるか！！？）

股をくぐるのが目的のように見せるため身をかがめる。

イヤンクックはその巨体を使い押し潰さんと倒れこんでくる。
しかし、それが狙いであった。

（ここでサイドステップ！！間に合え！！）

転がるように左へと跳ねる、桃色の巨体が眼前一杯にまで広がる！！

ズズズウウン

桃色の巨体が倒れこむ…、しかしその体の下にあるはずの潰れたド
スランポスが存在しなかった。

そして自身の右の翼に奔る激痛。

そう…、初めから狙われていたのは飛行するまたは風を起こすため
に必要な不可欠な翼膜であった。

（飛ばれたりしちゃあ何もできないからなあ、悪いがその羽潰させ
てもらった。）

「アアアアアオオウ！！アアアアアアアオウ！！」

その場で天に叫び始めるイヤンクック

そして幾度か飛び跳ねてからこちらに向かい猛進してくる

（切れたか…、次に狙うのは！！頼むから通じろよ…、俺の爪！！）
そしてまたイヤンクックに突撃をしかける。

(なっ！！バ…バカな！！全力で走りながら回転して尻尾でのなぎ
払いだと！！？ま…まずい…とにかく回避行動を！！)

予想もしていなかった動きに動揺しほんの一瞬だけタイミングがず
れる。

それは致命的な遅れであり、もはやその攻撃をかわすことは不可能
であった。

(まずい！！これは…当たる！！？)

そうかわすことは不可能……のはずであった。

ドオン！！カッン……ボムン！！

(グア！！？)

突如真横で発生した爆発により横倒しになり地面をすべるに転がっ
てゆく

転がりながら見えたものは自身のすぐ上を通過していくイランクッ
クの尻尾

そしてその後の爆発音であたりが白い靄に包まれ視界が奪われる。

(この靄はおそらくは煙玉か……？さっきの爆発は小型爆弾レベル
だった事をからみて……、

フランツか！！あいつめいい仕事をする。奴はオレのいたところに
突っ込んでいったはず！！不意をつつなら今しかない！！)

すばやく体勢を立て直すが右半身に鋭い痛みが奔る、見ると爆風を
くらったところが焦げている。

(つてえな!!でもあの尻尾くらつよりはましか!!
フツ……、こりゃしばらくフランツに頭があがらねえな)
そう思いながらもイヤンクックを捕捉するために周囲の音に感覚を
尖らせる

ズシャリ……ズシャリ……

ゆっくりだが確かに足音が聞える。

バツサ、バサ、バツサ

しかし、音がした方へと向かう前に旋風が巻き起こる。

(チィ!!残った方の羽で風起こしてやがる!!この煙を吹き飛ば
すつもりか!!)

全ての煙が吹き飛ばされる前に奇襲をせんとして一気に近づくと、
幸い葉が風で揺られて擦れる音で足音はまぎれている。
そして煙のなかで一際巨大なシルエツトが浮かび上がる。

カツン……キィィィィィィー……ン

しかし飛び掛る前に自転車のブレーキをかけたような音が鳴り響く

(~~~~~!!嫌な音だ!!音爆弾か!!あいつマジでサポー
トすんのが上手いな、
お陰で狙いたいところが狙える!!)

飛び掛ると同時に無事な方の羽の翼膜を掻き切り着地、そして狙う
は爆弾が当たり焦げている足首、そこに目掛けて渾身の力を振り絞

り切り裂く!!!

ザグン!!

一撃目 焦げた甲殻を切り裂くに至ったがまだ浅い

ザシヤア!!

二撃目 一度つけた傷口目掛けて再度爪を振り下ろす、肉を切り裂きその中にある腱に傷をつけるが断ち切るには至らなかった。

ついに煙が完全に消えイヤンクツクの全貌がはっきりと見える。

ザグシュ!! ブチブチブチ……………、

三撃目 そこに向かいがむしゃらで噛み付き食い千切る、

バツン!!

そしてついにイヤンクツクの脚から何か弾けたような音が鳴り響き、

片足の腱を切られたイヤンクツクはたまらず地面に倒れこむ。

地面に倒れ我に返ったイヤンクツクは目を見開き状況を把握しようとしたが……………、

見えた物は眼前一杯に広がった木樽とそのすぐ向こうにいる白い何か、であった

ドオン!!

目を見開いたまま爆発の直撃を食らったイヤンクツクの両目が吹き

飛び、
その意識をも永遠に吹き飛ばした。

辺りはすでに夕暮れ時になり空が赤くなっている。
そこでフ란ツとアルは大きな穴を掘っていた、

「本当にありがとうにゃ。皆を埋める為の穴を掘るのを手伝ってくれて。」
やはり仲間が死んだのは辛いであろう、その横顔は悲しそうであった。

『ここまでできて放っておけと？、オレ達は戦友だろ？放っておけるか。』

「ありがとうにゃ……………」
顔を伏せてそういつてくるフ란ツ

しばらくして穴を掘り終えその中にアイルー達の死体を放り込む。
そして積み上げた土を崩し埋め立てる。

「さよならにゃ皆……………」

『これからどうするっ？』

「わかんないにゃ……………」

『フランツ、よかつたらオレについて来てくれないか?』

「どういうことにや?」

『オレは、獣として生きていくのはゴメンだ、しかしオレが人と生きるためには人のために役にたたなくてはならない、まあ、言いたい事はだ、……………オレのお供アイルーになつてくれないか?』

流石に少し恥ずかしいのかアルは顔を少し背け目を合わせようとしなかつた。

「それもいいかもしれないや、確かに、アルはアイルー以外には言葉が通じないから僕にそれを頼むのはわかるにや……………でも、本当にぼくでいいのにや?」

こちらを探るようにフランツは言ってくる。

『お前しか頼める奴がない、それにお前と組んでイヤンクツクと戦つてわかつた!仲間としてこれ以上頼もしい奴はいないと!』

叫ぶように断言し真っ直ぐフランツの眼を見つめる。

「……………わかつたにや、けどお供アイルーにはならないにや。」

しかし返つてきたのは拒絶の言葉であつた。

『……………どうしてだ?』

動揺し、それ以外の言葉が出てこなかつた。

「僕たちは友達にや、主従関係なんて必要ないにや。これからよろしく頼むにや、アル!」

そう言つて頭を下げてくるフランツ

『ありがとう!!--フランツ!!--』

こちらと同じく頭を下げる

夕日がゆっくりと沈み夜が訪れ、月が昇る。

互いに見張りを交代し、その日の夜をあかす。

明日向かうは人の里、無事にアル達は受け入れられるかどうかは
まだ誰も知らない……。

4話目（後書き）

いやはや、感想でアルの通常時と驚いた時の口調が違いすぎると言われていましたが、書き直していてそれが良くわかります。

これは確かに違和感を感じる。

こっちのアルとあっちのアルでは口調が違いすぎてもはや別キャラ化してますね。

本当に口調って大事なものです。

細かい箇所でこうしたほうがいいなと思ったところは変えてありますので、

同じストーリーでも違うように感じられるかもしれません。

5 話目

『もう朝……か』

(この世界に飛ばされて2日目、すでに色んなことがありすぎたと
言っても過言じゃあないな……) そう思い苦笑する

「これは？」

爆弾で焦げた箇所や自分で傷つけた箇所になにやら緑色の液体が塗
りたくられている。

(フランツがやってくれたのか？痛みはもうほとんど無いな……
しかしどうやら違う痛みはあるようだ……これは筋肉痛らしい
な、昨日は一日で色んなことがありすぎたからなあ……、これは
どうやらこれは回復薬かな？あいつそんなものまでもってたのか……)

ガサガサガサ

何者かが此方に近づいてくる音が聞えてくる。

その何者かに問いかける

『フランツか？』

その足音がピタリと止まる、がすぐにまた此方に向かってくる

「にゃ？おきたのにゃ？」

そう言いながら現れたのは昨日相棒となった白いアイルーであった。

「どこいったんだ？」

と警戒を解きながら尋ねる。

「薬草とキノコを探していたのにや。」
そう言っただけで採ってきたものをこちらにみせてくる。

「と……言っただけは調べたものか？」
体に塗られた緑色の液体を示す

「そのとうりにや。」
胸をはってそうこたえるフランツ。

（ほう……こいつ調合もできるのか……、器用だな……っとも一つ聞くことがあったな……）

『なあ、フランツも一つ聞いていいか？』

「なんにや？」

『イヤクツクと戦ったときに使った音爆弾と煙玉……あれはどこで手に入れたんだ？』

（あれは……、特に音爆弾は調合するにも素材が手に入らないからな……、ハンターから買ってもしたのか？）

「ああ！あれのことによ、あれは兄さんから身を守るためについて不定期に送ってくるやつによ、その時お金も少しだけおくってくるによ、他にも閃光玉とかとにかく敵から逃げれるものかなりあるによ。」

『なるほど、弟思いのいい兄さんだな』
少し笑いながら言う

「そうにや、僕の目標にや。」
よほど尊敬しているのだから目が輝いている

『そうか、ところで飯食ったか？オレは昨日殺したイヤンクックでも食うが・・・、お前は何を食べるんだ？』

「そのことでの願いがあるにや！！」
いきなり身を乗り出し大声を上げる。

『な・・・なんだ？大抵のことならいいが、無理なことは無理だぞ？』

「簡単にやことにや。魚を獲って欲しいのにや！！」
平然とそう言い放ってくるフランツ

『さ・・・さかなあ？』

（あゝなるほどこいつネコだからなあ・・・しかし魚か・・・今のオレの運動神経なら獲れるやもしれんな、だが・・・）

『待て待て、魚だと？どうやって獲れというんだ？』
一応尋ねてみる

「一番てつとりばやいのは川に音爆弾投げ込むことにや。一瞬でかたがつくしにや。でもこんな状態では少しもつたいないにや。だから川のなかで大声で叫んでほしいのにや。」

『あゝ・・・なるほどなるほどお前の言うことは理解した・・・、でもそれで失敗しても恨むなよ。』

そう念を押し、近くにある水場へと入っていく。

（やっぱり脚が痛いな・・・、しっかし大声だただけで魚が気絶なんてするかよ・・・、したらオレの声が音響爆弾並みってことじ

やねえか・・・)

どれだけ痛もうがおくびにもださない一種の意地であるそして脚部が完全に水に入ったところで顔を水中に完全に沈め・・・

「ッ!」

ゴボン・・・ゴボ・・・ゴボゴボン

声をだし水泡が出る。結果は・・・

『プハッ』

顔を水から上げあたりを見渡すと・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

マジかよ』

2、3匹の魚が白い腹を見せて水面に浮かんでいた。

パチツパチ 魚の焼けるいい匂いがしてくる。

「いや〜思ったとおりだったにや、ありがとうアル」

『別に・・・』

「そうふてくされることないにや、それは一種の特技にや。」
笑いながらそういつてくるフランツ

『別にふてくされてなんかねえ……』
ぶっきらぼうに言い切る

「それをふてくされてるっていうにゃ」

(くそう……シヨックだ……オレの声は音爆弾並みなのか……
みてるよ……いつか耳元で叫んでやる)
そう固く復讐の決意を胸に秘める

『それはそうと……、そろそろ出発だな……、どこに行く?』

「ここから一番近い人里はココット村にゃ」

『君の兄さんがいるところか?』
少し気になって尋ねる

「兄さんがいるのはドンドルマにゃ」

(ドンドルマ……、厄介なところにいるな……、少し名を上
げてからじゃないとあんなハンターだらけの町なんていけねえぞ……)

『そうか……で、知り合いはいるのか?』

「ハンターギルドのマスターに今回の事を報告する時に頼んでみる
にゃ。」

そう言いつつ少し冷ました焼き魚を食べている。

『お前の指示に従おう、どこに村があるかオレにはわからんしな』
イヤンクックの肉を引きちぎりながら話す。

「実は僕も詳しい場所は忘れたにや、というより外敵から身を守る為、に隠されてるにや。だからまず龍人族の爺ちゃんに聞きに行くの
にや」
食べ終わったのか顔の毛づくろいをしている。

『そうか・・・フランツ！これもつといてくれ』

そう言つて口から放つたのは食事の際喰いちぎったイヤンクックの耳

「わかつたにや」

すこし嫌そうな顔をしたが了承する。

『じゃ・・・上に乗れその爺さんとやらの所に向かうぞ、案内を頼む』

そう言つて脚を折りしやがみ首を下げる

「任せろにや」

よじ登りながら自信満々で言ってくる

『では・・・いくぞしつかり？まれ』

ゆっくりと走りだす。その背中にアイルーを乗せて・・・。

二匹がその場を去つた後に残つた血の匂いに惹かれて肉食獣が集ま
つてきていたのを二匹は知らない・・・、そしてその何匹かは足跡
をたどつて来ていることも・・・。

5 話目（後書き）

小説書く時間が取れない。受験勉強が忙しい、そんな私は高校2年。短期留学扱いになったからここで落とされるわけにはいかない。という訳で更新のペースが不定期になります。申し訳御座いません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5239i/>

憑依先・・・これはねえだろ・・・

2010年10月15日21時26分発行